視野広げ

あす表彰式

「第5回みんゆう新聞感想文コンクール」には3部門に県内84校から1185点の作品が寄せられ、審査の結果、各部門で最優秀賞1点、優秀賞3点、入選5点の入賞作品と学校賞3校が決まった。表彰式は13日、福島市の福島民友新聞本社で行われる。最優秀賞、優秀賞の受賞作品を紹介する。（原文のまま）

コンクールは、小・中学校で新学習指導要領に「新聞の活用」が明記されたのを機に、児童・生徒の広い視野と豊かな心を育む生きた教材として新聞を活用、確かな表現力を身に付けてもらう目的で実施している。

「新聞掲載記事を読んでの感想」をテーマに、今年5月から8月までに福島民友新聞をはじめ日刊紙に掲載された一般記事や社説、コラム、連載企画、こども新聞などを読んで感動したこと、興味を持ったことなどの感想文を募集した。今回も、震災や原発事故、風評被害関連の記事をはじめ、復興や終戦記念日に関することなど多岐にわたり、記事を読んで感じたこと、自ら体験したことなどを踏まえての作品が多かった。

審査長を務めた福島地区中学校教育研究会国語部長の西牧伸弘福島市立渡利中校長ら審査員が厳正に審査し、入賞作品を選んだ。

審査員次の通り。

審査長＝西牧伸弘（渡利中校長）▽副審査長＝後藤修（金谷川小校長）▽審査員＝佐藤丁弐（北信中教諭）佐藤友子（月舘中教諭）舟山正博（梁川中教諭）節内千絵（本宮一中教諭）田中聡（二本松一中教諭）村越健一（大玉中教諭）渋谷朋子（野田小教諭）藤原健司（月舘小教諭）山田麻子（東和小教諭）

各部門の入賞者

【小学3・4年生の部】
◆最優秀賞
小関　夏穂（関柴3年）
◆優秀賞
佐藤　愛莉（桜の聖母学院3年）
渡辺　和泉（二本松北3年）
宮原知大真（原町二3年）
◆入選
豊岡　奏多（桜の聖母学院3年）
山田　渓太（大島3年）
小菅　泰誠（桜3年）
加藤　雄真（柏城3年）
占部　太提（桜の聖母学院4年）

【小学5・6年生の部】
◆最優秀賞
渡辺　弥生（二本松北6年）
◆優秀賞
八重樫佑希（野田5年）
白土　愛理（泉北5年）
豊岡　桃香（桜の聖母学院6年）
◆入選
小泉　寿輝（泉北5年）
仁井田侑紗（吉井田6年）
小林　史歩（吉井田6年）
矢吹穂香良（大山6年）
丹野　功誠（泉北6年）

【中学生の部】
◆最優秀賞
鈴木　麻由（郡山四1年）
◆優秀賞
高沢　夢実（福島大付1年）
斎藤　凪都（白河二2年）
香川　布結（会津学鳳2年）
◆入選
福島　早希（福島大付2年）
高野　紗月（北信3年）
渡辺　輝大（岳陽3年）
小野寺　拓（福島大付3年）
郡　友哉（鹿島3年）

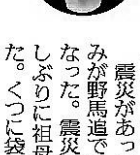
【学校賞】
泉北小（いわき市）
福島大付中（福島市）
鹿島中（南相馬市）

中学生の部

◆最優秀賞

「相馬野馬追に思う ～未来を見つめて～」

郡山四中1年　鈴木　麻由さん



新聞のページをめくると、私の目に『相馬野馬追』の記事が飛び込んできた。そして私は、その記事を一気に読んだ。

私の夏休みは、いつも野馬追で始まっていた。私の祖母の家は南相馬市の小高区にある。毎年夏休みになると、真っ先に祖母の家に行く。そして、近所の人や親戚の人など、大勢の人と一緒に野馬追の行列を見るのが恒例だった。野馬追で始まった夏休みには、楽しい思い出がたくさんある。祖母の家のベランダから見える花火。貝がらを拾ったり、カニを捕まえたりして遊んだ海。すべてがキラキラとした大切な思い出だ。

しかし、二〇一一年三月一一日。あの東日本大震災で、それは一変してしまった。あの時、私は小学三年生だった。帰りの会の途中。机の下に隠れたが、揺れが大きく、何度も机の足に頭をぶつけた事を鮮明に覚えている。家でもたくさんの食器や本が床に散乱し、その衝撃の光景は今でも目に焼き付いている。そして、原発事故が起こった。祖母の家がある小高区は避難区域となり、祖母は避難を余儀なくされた。一晩すれば帰れるだろうと思い、小さな手さげバックを一つ持って家を出たそうだ。きっと、皆そう思っていただろう。

震災があってから、私の夏休みが野馬追で始まることはなくなった。震災の次の年の夏、久しぶりに祖母の家へ行ってみた。くつに袋をかぶせて中に入った。水も電気もなく、カレンダーもあの日のままだった。家の外にも中にも大きなくもの巣がたくさんあった。あのにぎやかだった街が、人通りもない不気味なくらい静かな場所に変わっていた。

そして、震災から三年以上たった今。一歩一歩確実に前に進んでいると思う。野馬追も、あの頃のままとはいかないがそれに近い形で開催されるまでになった。しかし、小高区では、まだあの大勢の人と一緒に行列を見ることはできない。記事に載っていた松本さんも、奥さんだけに見送られての出陣だ。「立派な姿でみんなを激励したい」という松本さんの気持ちが、痛いほど伝わった。「いつか『あのころは大変だったね』ってみんなで笑えれば」と奥さんは言う。祖母の避難生活が今だに続いているように、まだ元通りとはいかない。でも、松本さんが感じているように「少しずつ当たり前のことができるようになってきた」と私も思う。

今、私にできること。それは、いつか、何年かかってでも、元通りの生活に戻った時に、「あの時は苦労したね」「あの頃の経験は無駄じゃなかったね」と笑えるように、今、この時を大切に、精一杯生きる事だと思う。当たり前の生活ができるありがたさ・すばらしさをかみしめながら、しっかりと未来を見つめ、前を向き、胸を張って進んでいきたい。

◆優秀賞

「土曜授業が始まったら…」

福島大付中1年　高沢　夢実さん

ソフトテニスで実業団に入って、日本代表選手になる。これが、私の夢だ。そのために、小学生のころから、ほぼ毎日、夜のテニスコートで父との練習を続けてきた。さらに、土日は、福島県だけでなく、他県で行われる大会にも、できるだけ出場し、多くの試合経験を重ねようと努力してきた。

中学校に入学し、中体連全国大会出場の目標をもった仲間とともに、夢に向かって、さらに練習に打ち込んでいきたいと思いを新たにしていた。そんなとき、福島市が来年度から土曜授業実施の方針を示したという記事を目にした。土曜日の教育環境を整備し、特色ある土曜授業を実施することで学力の向上を目指すという方針に、私は不安を抱いた。確かに、土曜日に行事や総合的な学習を実施することで平日の授業が充実し、学力向上につながるかもしれない。しかし、土曜日が学校になることで、参加できる大会は日曜日のみとなってしまう。そうなると、強くなるために必要な経験値が低くなってしまう。しかも、部活動や地域活動を考慮し、土曜授業に積極的ではない自治体もあるそうだ。すると、地域によって、練習量や試合経験などで、レベルの差が生じてくる可能性がある。全国を目指して努力してきた私は、福島市の方針を素直に受け入れる気持ちになれない。

関連記事を探していると、『学校の土曜授業　子どものための視点で』という論説文を見つけた。福島市も生徒の土曜日の活動を調査したうえで、土曜授業の実施回数や時期を決めるとしていたが、その調査は本当に『子どものための視点で』行われるのだろうか。大人が言う『子どものための視点』という言葉は、どことなく表面的だ。何事も、当事者の私たちを置きざりにして、決まっていく。実際、こうやって土曜授業についての考えを私が述べたのもこれが初めてのことだし、友達と交わした議論も、反映できる場は今のところない。さらに、論説文では、土曜日が、原発事故で離れて暮らす家族との時間であることに触れていた。私は、自分の夢のために必要な時間が失われる不安を抱いて、土曜授業について考えた。しかし、自分だけのものではなく、家族がじっくり対話し、いたわり合う時間を土曜日に過ごす人々もいる。もっと視野を広げていけば、土曜日に流れる時間には、様々な意味が見えてくるはずだ。

私たち一人一人にとって、深い意味を持つ土曜日の時間をどう使うのがいいのか、また、学力向上に向けた平日の授業の改善について、やれることは全てやったのか。私たちの思いをしっかりと吸い上げる議論が重ねられたとき、本当の意味で『子どものための視点で』土曜日の時間の使い方が見えてくるのではないかと思う。

今年で5回目を迎える「みんゆう新聞感想文コンクール」は、小・中合わせて1185点もの作品が寄せられました。このコンクールが価値あるものとして県内の小中学校にしっかりと根付いてきたことを実感します。

全体を通し、自分の興味・関心から記事を選択し、家族や本、他の新聞等多様な手段で事実を確かめ、それを基に自分の考えや生活を見つめ直し、将来に向けて考えを深め、広げているところが素晴らしいと感じました。

題材となる記事を見ると、大きな事件や事故、身近なニュース、戦争の体験、コラム等実にさまざまでした。その中で、震災・原発事故に関連した復興支援や風評被害にかかわるものも多く、視点も多様で、復興途上にある福島の現状を映し出しているように感じました。

小学3・4年生の部門では、地域の頑張りや良さに目を向け、自分の生活や考え方をより良くしようと考える作品が多く、さらにもっと調べてみたい、次の行動につなげたいと思う姿に、素直さと力強さを感じました。

小学5・6年生の部門では、新聞記事から、当たり前と思っていた自分たちの生活をもう一度見つめ、考え直す作品が多くありました。書き方も、論理的に筋立てて書こうとする姿勢が見られ、思考の高まりを感じました。

中学生の部門では、自分自身の将来にかかわらせて記事を選択している作品が多く見られました。しっかりとした構成力、表現力に支えられ、自分なりの提案や主張に発展させている点はさすがに中学生と感じました。

今後の課題としては、応募規定に関するほか、誤字脱字等の表記上の誤りや、記事と自己の経験との関連性等が挙げられました。

毎日触れる新聞は、子どもたちの視野を広げるとともに、「生きた教材」として活用することにより主体的に課題解決するための思考力、判断力、表現力を培う上で格好のものです。このことから、この新聞感想文コンクールの存在と果たす役割は大きいものがあります。本コンクールの今後ますます発展を祈念します。

審査長講評

福島地区中学校教育研究会国語部長
西牧　伸弘（福島市立渡利中校長）

新聞は「生きた教材」

◆優秀賞

「郡山北工高の快挙に思ったこと」

白河二中2年　斎藤　凪都君

郡山北工業高校のチームが国際ナノ・マイクロアプリケーションコンテスト世界大会で優勝しました。「世界一」との見出しに、すごい賞をとったのだろうと予感し記事を読み進めると、この大会は、微小電気機械システムの活用法を競うもので、今回は「防災・減災への応用」をテーマに、京大や東北大などを含む世界十カ国二十三チームが参加し、その中で郡山北工の防災ロボット「ProROBO」が優勝したと報じていました。

僕の将来の夢は、エンジニアになって技術開発に携わることです。例えば、水などの豊富に存在する物質を燃料化する技術を発展させ、有害物質を排出しない環境に優しいエンジンなどを開発して、人々の日常の生活をもっと豊かで便利にしたいと思っています。

技術開発に関心があったので、この記事に接した時、僕は「高校生、それも県内の高校が世界一の評価を得たロボットとはどんなものなのだろう。」と興味がわき、インターネットでも詳しく調べてみました。

ProROBOは、四輪駆動のラジコンカーのような形状で上部に振動や熱などのセンサーを備え、タブレット端末で現在状況を確認しながら遠隔操作が可能であり、災害時にいち早く異常を警報したり、センサーで行方不明者の捜索もできる多機能型の防災マシーンです。動画を見ると、その動きはとてもスムーズで、マイクロアプリの名のとおり、非常にコンパクトに様々な防災機能がまとまっており、操作も簡単そうでした。

原発事故を経験した福島県民ならではの視点と発想を生かし、それらアイディアを機能的にコンパクトにまとめる技術力は、本当にすごいと思いました。さらに感心したのは、発表を英語で行っていることです。どんなに優れた技術でも発信する力がなければ普及しません。プレゼンを上手に行うために努力したと記事にありましたが、高い目標に向けて何事にもしっかりと取り組む姿勢は僕も見ならわなければと大いに刺激になりました。

福島県では、将来の浜通りの復興を進めるために福島・国際研究産業都市構想の中で廃炉や防災に向けたロボット開発を進める計画があるそうです。是非、その構想を具体化する中で、県内の若者のアイディアを取り入れてほしいと思います。外部からでは決して思いつかない斬新な発想から、復興や産業を加速させる技術が生まれてくると思います。

県内の方々の世界レベルでの活躍は、私たちに元気を与えてくれるとともに郷土に対する誇りを一層強めてくれる効果があると思います。僕も改めて自分の夢に向けて努力する力を得たように思います。最後に、このような大きなパワーを発信してくれた郡山北工高の皆さんに感謝したいです。

◆優秀賞

「魔法の仕事『翻訳』」

会津学鳳中2年　香川　布結さん

私が、中学生になって一番好きになった教科は英語です。日本語からの変換の面白さ、そして何より他の国の人々に自分の思いを伝えられるということに喜びを感じ、魅せられました。

こんな私が、今興味を持っている職業は、翻訳や通訳の仕事です。外国語に深く関わっていることができ、文章を読むことが大好きな私には夢のような仕事です。このような仕事があることを、はっきりと私に教えてくれたのは、「ハリー・ポッター」シリーズを訳した松岡佑子さんです。私は小学校四年生で「ハリー・ポッター」に出会い、中学校に入ってから理解できるようになりました。「ハリー・ポッター」は、私に物語の楽しさと英語のおもしろさ、翻訳のすばらしさを教えてくれた、本当にかけがえのない本です。そんな「ハリー・ポッター」を翻訳した松岡佑子さんの記事を見つけた時は飛びあがるほどびっくりし、とてもうれしかったです。自分の大好きな物語にかかわる、今一番興味のある職業の人が、記事として目の前に現れたので、心をはずませて読み始めました。松岡佑子さんが、「ハリー・ポッター」を翻訳する前、通訳をされていたことは知っていましたが、どのような所で働いていたかなど、知らなかった事はたくさんありました。

この記事には、松岡さんが「ハリー・ポッター」に出会う前、どんなことをしていたかが記されています。松岡さんが、アジア弁理士協会や国際労働機関で通訳したときの話に興味をそそられて、何回も読み直してしまいました。読めば読むほど松岡さんの頭の良さと適応能力の高さがうかがえます。

そして、この「翻訳の魔法　松岡　佑子」というサブタイトルに、私は、とても共感しました。本当に「翻訳」は「魔法」だと思います。すでに出来上がっている一つの物語をもう一回新しく作り直すようなものですから、翻訳者はいわばもう一人の作者といっても過言ではないと思います。アイディアは作者の方が持っているにしても、文才の方は作者に負けず劣らないものを持っていなければ出来ない仕事です。だから、私は翻訳者の方を尊敬します。

私は将来、語学が特に必要とされるような仕事につきたいと考えています。その仕事がもし翻訳や通訳の仕事であったら、こんなにうれしいことはありません。ですから、この記事を読み深めたことは、将来なんらかの形で私に影響をおよぼすかもしれません。将来迷った時は、原点に戻って今回のことを思い出してみたいと思います。この記事は、私に「翻訳の魔法」について考えるきっかけをつくってくれたと思います。